

（一）現代文

【出題意図】

問題文は『イコノクリティック—審美渉猟』（谷川渥著）に収録された「味覚と距離」から抜粋した。料理やそれを味わうことは自然から距離をとった社会的・文化的な営みであるという指摘を踏まえて、美学の領域で視聴覚と比べて下位の感覚として貶められてきた味覚が、複雑な感覚と思考の回路をたどることで「美について語る」ことにつながるということを論じた文章である。本文の内容理解を測ることを中心に作問した。

【採点のポイント】

問一

漢字の読み書き。文脈に即して正しく読めているか、書けているか。

問二

抜き出し問題ではないが、当該段落で対比的に示されている舌の側面を二点挙げること。

問三

内容理解と説明の問題。傍線部を含む第2～3段落の内容を踏まえて、料理の本質と、その出来映えを素材に帰着させることが不適切であるということを理由として記述できているかどうか。

問四

内容理解と説明の問題。傍線部を含む第5～6段落の内容を踏まえて、すべての料理が本来は文化的な産物である以上、発展途上国のそれだけをエスニックと呼ぶことを批判する意図を説明できているかどうか。

問五

内容理解と説明の問題。傍線部まで、味覚が人間の生存に関わる直接的なものであるだけでなく、さまざまな社会的制約との関係性のなかにあることが述べられている。そうした社会性や文化的側面を具体的に説明できているかどうか。

問六

内容理解と説明の問題。ブリア＝サヴァランとカントの議論を紹介した直前部分を中心に、本文全体の主旨を理解できているかどうか。味覚を美の領域として語ることが逆説的だという意味について、味覚が低級感覚として貶められてきたこと、その直接性ゆえに言語化までに迂遠な回路を取る必要があることの両面から適切に説明する必要がある。

【講評】

問一

漢字問題。回答率の高い問題と低い問題があり、それなりに点数差はできた。

問二

正解率の高い問題であったが、学力「中」と「低」で差がついた作問であった。

問三

料理は素材に手を加える自然からの距離化の産物であるという筆者の考えが、素材そのものの良し悪しで勝ち負けを決めてしまっている『美味しんぼ』対決に難点を見出す前提である。こうした前提を示した上で「究極 vs 至高」の問題点を指摘するか、問題点を解消するための条件を指摘することができれば、出題の意図を満たした答案を作成できる。要素をおさえて書いている受験生が多く、得点率は高かった。

問四

傍線部 C の「不思議な表現がある」という部分には批判的な意識が込められていることを読み取る必要がある。とくに問題文の指示は「ここに込められた筆者の意図を」読み解くことであり、「不思議」を分かりやすく言い換えることではないことに注意したい。また、傍線部より後の「どれだけ人口に膾炙しているか」という表現について、慣用句の意味を取り違え、人口の少ない発展途上国といった誤解をしている答案が散見された。

問五

採点のポイントは、傍線部の「すべて」が指示する内容を押さえているか、「味覚の直接性」と「包囲している」とはどういうことかを説明できているかという 3 点に集約される。特に「包囲している」という比喩的な表現の捉え方については解答にややバラつきが見られたが、直前に「さまざまな距離と形式とからなる複雑な網目のなかの関係性」とあることを踏まえて記述したい。誤字のほか、主述のねじれや論旨の乱れについては減点した。

問六

「しゃべる舌」と「味わう舌」の機能の違いを述べた本文全体の内容を踏まえ、両者の内実とその関係の構図が逆説的であるとはどういうことか、明快に説明することが求められていえる。前頁でブリア＝サラヴェンの引用文の直前にある「この逆説」が指す直前部を転記するだけでは不十分で、「逆説」の意味を説明できていないものも減点対象とした。「逆接」という誤記も散見された。

(二) 古文 講評

【出題意図】

『平家物語』巻三「少将都帰」による。鬼界が島に一人取り残された俊寛の逸話（『平家物語』「赦文」「足摺」）はよく知られ、古文教材にもなっているが、ここでは赦免された側の成経と康頼が描かれている。本文は平易な表現であり、「鬼界ヶ島に流されていた少将成経と康頼入道が、許されて都へ帰った時のこと」という前提をふまえて内容を理解しているか、その文脈にそって単語や文法の知識を活用した解釈ができるかを問うた。

なお、本文は新編日本古典文学全集『平家物語』によったが、表記は理解しやすいように一部改めた。

【採点のポイント】

問一

誰に対する敬意かを読み取れているか、語群から正しく選択しているか。

問二

基本的な文法・用法を理解し、「きこそ」「けめ」を適切に訳出できていることが要件となる。

問三

基本的な古語の意味を文脈に即して解釈できているかを見た。

問四

三歳くらいの子どもが、配流された時に妻が懐妊していた子であり、配流の間に無事に三才まで育っていた、という二点を読み取れていることが要件となる。

問五 ①

助動詞の意味・活用の知識を問う設問。助動詞を正しく抜き出していることを採点の前提とした。

問五 ②

設問に「内容がよく分かるように言葉を補って」とあり、次のような点が具体的に記されていることが要件となる。

・第四句「思ひしほどは」について、何をどのように思っていたのか。島に流されている間に、自分の山荘は荒れて、軒は隙間だらけになってしまっているだろうという内容。

・第三句「苔むして」と第五句「もらぬ月かな」との関係。軒の板間に苔が生えて、思ったほどには月の光がさし込んでこないという内容。

【講評】

問一

正解が多かったが、母うえ、小將など、記載する際のケアレスミスがあった。

問二

あまりできていなかった。「きこそは」は推量と結びつくと「きっと」の意味となるので、この場合「そのように」や「とても」という訳はふさわしくない。「けめ」は過去推量で、「～ただろう」と訳すべき。「～ようだ」「～にちがいない」という訳は他の助動詞(「めり」「べし」)の訳にこそふさわしいため正解とはしなかった。

問三

正解が多かったが、aについては「成長して」「大きくなって」など、的確でない答案も目立った。bについては文脈を考慮せずに「すぐに」と答えているケースも複数見られた。cについては「つらい」「苦しい」など、過去の助動詞「き」の連体形「し」を訳していない答案が多かった。文脈を考慮して言葉の意味を考えると、表現の語構成を考慮して訳出することが重要である。

問四

傍線部は「三つばかりなるをさなき人」を見ての感慨である。この子どもが、その前に出てくる

「ながされ給ひし時、三歳にて別れしをさなき人」とは別の子どもであることを把握することが肝要。ここが把握できていない答案が目立った。

問五 ①

ほぼできていたが、助動詞でないものを抜き出した人が少しいた。「(苔むし)て」など。この場合減点した。これとは別に助動詞の活用形と意味を間違えた人が2割ほどいた。古典文法の知識は確実に身につけておいてほしい。

問五 ②

歌の詠まれた状況とことばそのものを考えあわせて、趣旨を的確にとらえることが肝要である。採点のポイントのうち、自分の山荘が荒れてしまっていると思っていたという内容の明記されていない答案が多かった。一方、「苔むして」は島に流され都を離れて長い時間が経ったことを表しているという趣旨の説明を加えている答案もあり、これについては加点ポイントとした。「いたま」は「板間」であるが、「居た間」を掛けていると解釈しているもの、「もらぬ月」は「漏らぬ月」であるが、「盛らぬ月」と解釈しているものもあった。いずれも、現代の短歌であればいざしらず、当時の語法からすると無理な解釈である。古文のことばとその用法になじんでおくことも大切である。

(三) 漢文

【出題意図】

今年度は『戦国策』からの出題。総字数百二十字程度で、ほぼ例年なみの長さの文章。返り点・送り仮名を手がかりに内容を正しく読み取る力を備えているか、また、返り点の付け方や、基本的な語句の読みなど、漢文を読むための基礎的な学力が定着しているかを主眼に出題した。

【採点のポイント】

問一

漢文を読解する上で最も基本的かつ重要な語である「若」字の読み方を問う問題。「若」は「ごとし・もし・しく・なんぢ(じ)」と、多様な読み方をし、いずれの読み方もよく出てくる、漢文の最重要語である。単に読み方を知っているだけでなく、前後の文脈からどう読むべきか、的確に判断することが求められる。送り仮名が不適切なもの、ついていないものには、部分点をあたえた。

問二

書き下し文に従って返り点を正しく付けられるかをみる問題。完答のもののみ、点数を与えた。返り点を付ける問題は、ほぼ毎年出題している。入門期の学習が定着していれば、平易な問題。完答の場合のみ点を与えた。

問三

問題文の文章が読解できているかを問う問題。西周の君主が蘇子に欺かれ、麦作りを妨害するために水を流した、もしくは水を抑えられた東周の民が、西周の言いなりになるといっ

た解答をしてほしかった。誤字は減点、二十五字に満たない答案は0点とした。

【講評】

問一

Aはおおむねよくできていたが、Bは正答率がやや低かった。Cは送り仮名を適切に付けられていない答案が多く見られた。

問二

おおむね良くできていた。本学科受験を希望する者は、返り点の付け方ぐらいはしっかりと学習しておいてほしい。

問三

予想していたよりは正解率が高かった。ただし、東周の民に恩を感じさせるためといった趣旨の解答が一部にあったが、西周の君主は麦作りを妨害する意図で水を流しているのがあるから、不適切であろう。与えられた字数の中での確にまとめきれていない答案も一部にあった。字数制限のある問題の演習も、普段からしっかりとやっておきたい。